日常会話における助詞の省略

前　田　昭　彦

キーワード：省略、復元、格、共起制限、必須成分

1．はじめに

外国人学習者に日本語習得上の困難を尋ねると、大半が助詞の学習を挙げる。学習者の助詞の誤用には、「学校ニ日本語ガ習う。」といった誤使用、「明日ニ買い物に行く。」といった過剰使用、「ここφ友達φ会います。」といった不自然な省略などがある。日本語学習者が抱える助詞習得の困難は正確な助詞使用に関するものだけではなく、正確な助詞不使用に関するものもある。

助詞を学習するに際して学習者をとまどわせるのは、日本語母語話者が助詞をしばしば省略するという現象である。実際、気をつけていると、あらたまった会話の場合を除き、母語話者は書き言葉であれば助詞が使用されるはずの所でかなり頻繁に助詞を落として発話を行っている。ところが、外国人学習者が同様のことを行うと、往々にして不自然に聞こえたり、意味が不明になったりする。これはなぜであろうか。

談話の文法が注目され、省略の研究がなされるようになって久しいが、このような助詞の省略はさほど問題にされてこなかった。本稿は助詞に関して省略の可能、不可能を吟味し、助詞省略の法則性を探り、さらに助詞省略のもつ意味を考察しようとするものである。

2．助詞の省略と復元可能性

助詞の中には会話において省略可能なものと不可能なものがある。省略の可否を決めるものは第一に意味である。言語的、非言語的文脈において助詞を省略しても文意が紛れなく伝達できる場合にのみ助詞の省略が許されるという点には議論の余地はあるまい。第二に久野（1978）で指摘されているように復元可能性である。この点に関しては多少問題があるので、それについては

後述する。

近年助詞分類の再構築の試みがさまざまになされている。しかし、従来の学校文法にかわる確立した分類はまだ見当たらない。したがって文法上の呼称については基本的には学校文法の分類に従うことにする。しかし、それはあくまでも便宜的なものであり、筆者がそれを全面的に肯定しているわけではない。

どのような助詞が省略になじみ、どのような助詞が省略になじまないのか検討するにあたり、当該部分の記号は次のように用いる。？はやや不自然なもの、＊は文意不明または不自然となり不適格、φは書き言葉であれば助詞が現れると考えられる個所、すなわち助詞の省略がなされている可能性のある個所、括弧内の助詞は省略されたと考えられるもの、（φ）は助詞の省略、（0）は本来助詞不使用すなわち助詞ゼロの可能性が高い個所を示す。

久野（前掲）では「省略の根本原則」として＜省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能（recoverable）でなければならない＞ことを挙げている。しかし、ここではインフォメーションの新旧から文の自立的要素に関する省略が問題にされているのであって、非自立的要素である助詞は考察の対象にされていない。したがって、上記の省略についての記述は助詞の省略にそのまま借用することはできない。助詞の省略においては、復元可能であっても、復元すべき助詞を一義的に決定できないことがある。やや誇張していえば、省略はしたが、省略した当人ですらどの助詞を復元したらいいのか迷わざるをえないという事態が出来しさえするのである。さらに、省略されたとおぼしきものがあるのに、それが直ちに助詞の省略を意味しないこともある。

例えば、次の対話ではどうだろう。なお、文頭のA，Bは以下話者を示す。

(1) A：君（　　）中国語できる？
　　B：いいえ、英語ならできますが、中国語はちょっと。

(2) A：博多（　　）広島（　　）は新幹線で1時間で行けるだろうか。
　　B：行けるかもしれないよ。

(3) A：あのレストランはおいしそうだ（　　）。
　　B：そうだね。あそこで食べよう（　　）。

(1)では（　　）に、ハが復元できる。しかし、無助詞のままでもなんら不都合はない。また、AがBに多少の軽視を含意して発話するという言語外の

文脈があれば、(　　)にはニが復元できる。このように本来無助詞であるべきか復元可能かに関しては慎重な吟味が必要となる。

(2)の2つの(　　)にはa.(から)(まで) b.(から)(へ) c.(と)(の間) d.(0)(間) e.(0)(0)などの可能性が考えられる。このように慣用的に用いられていて、しかも復元を試みると、助詞や助詞以外の語が多様に考えられるものは、本稿で助詞の省略として扱わない。

(3)Aの(　　)は(ね／な／よ)、Bは(か／よ／な／ね)などを補うことができる。だが、この種の終助詞は本来感情の表出のために使用されるので、終助詞を使用していないということは、その終助詞に託して表現したい感情が無いことを意味しているのだから、このようなものも助詞省略としては扱わない。

3. 助詞省略の実態調査

助詞の省略ないし脱落は日常会話においてかなり頻繁に見られるが、会話をテープにとって調査することはさほど実際的な方法とは思われないので、テレビを利用することにした。初めはNHKのトークショウで試みたが、たまたま出演者が年配の人でもあり、またかなりフォーマルな意識が働いていたせいか、思ったほど助詞の省略は拾えなかった。そこで、いくつかのドラマを材料に使うことにした。ドラマは家族や友人を中心にしたもので、くだけた会話が多く、日常的な会話を反映していると思われるものを選んだ。題名、原作者ないし脚本家、長崎での放送日、放送開始時間、放送所要時間(コマーシャルを含む)は次のとおりである。

① 日曜劇場『まかせてダーリン』、林 誠人脚本、3月22日(日曜日)、21:00、1時間
② DAYS『夢を追いかけて･･･旅立ちの日』、大石 静脚本、3月23日(月曜日)、21:00、1時間24分
③ 『熱中家族』、国沢真理子脚本、3月24日(火曜日)、13:00、30分
④ 『車椅子の金メダル』、高橋幸春原作・杉原邦彦脚本、3月24日(火曜日)、13:30、30分
⑤ 『熱中家族』、国沢真理子脚本、3月26日(木曜日)、13:00、30分
⑥ 『車椅子の金メダル』、高橋幸春原作・杉原邦彦脚本、3月26日(木曜日)、13:30、30分

⑦ 『番茶も出花「みんな家族です」』、橋田寿賀子脚本、3月26日（木曜日）、21:00、1時間

以下、必要に応じて①は（まかせて）、②（夢）、③（熱中①）、④（車椅子①）、⑤（熱中②）、⑥（車椅子②）、⑦（番茶）と略す。

収集はドラマを録画して、2ないし3回聞き返しながら行った。ただし気が付かないで聞き落としたものも多少あると思われるが、統計的に有意なだけの収集はできたものと確信している。数値は絶対数ではなく、相対的な比を示していると解釈していただいたほうがいいかもしれないが、それでも、かなりの程度まで実数に近いということができる。

下は上記ドラマで収集した助詞省略と考えられる部分の数を表にしたものである。

表1　テレビドラマにおける助詞省略の瀕度数

	ハ	ヲ	ガ	ニ	ハ／ヲ	ハ／ガ	ハ／ニ	ヲ／ガ	0／ハ	0	0／ガ
まかせて	11	8	1	2	1	5	0	1	1	1	0
夢	8	10	5	4	0	1	1	1	7	0	0
熱中①	5	12	8	0	1	1	0	0	1	0	0
熱中②	17	23	3	1	1	1	0	1	2	1	0
車椅子①	8	5	5	0	1	1	0	1	1	1	1
車椅子②	12	7	2	0	0	0	0	0	0	2	0
番茶	31	54	13	6	0	3	1	1	0	1	0

表中のハ／ヲ、ハ／ガ、ハ／ニ、ヲ／ガはそれぞれ助詞ハとヲ、ハとガ、ハとニ、ヲとガのいずれも入る可能性があることを示し、0／ハ、0／ガはそれぞれ助詞0かハ、0かガのどちらがより適切か決め兼ねるものを示す。0は無助詞が最も適切と考えられるものを示している。

4．テレビドラマにおける助詞省略の傾向

表1で分かるように、全体としては助詞ハとヲの省略が多く、次いで助詞ガの省略が多いといえる。ハとヲの省略が多いことは予想通りであったが、ガの省略が比較的少ないのは予想外であった。助詞ニの省略は特に問題があるところなので省略例が集まることを期待していたが、思ったほど収集できなかった。なお、ニの省略のいくつかは助詞への省略とみなしてもいいところである。これについては後で触れる。助詞デの省略は皆無だったので、表

に示さなかった。当然であるが、フォーマルな場面やシリアスな場面、また、ゆっくりした口調で話す場面では助詞の省略はほとんどなかった。これも予想されたことではあるが、助詞省略ないし無助詞という現象は、家族間、友人間のテンポの速いインフォーマルな会話や発話の中で頻繁に見られた。

5．助詞ハの省略

5．1　助詞ハ省略の条件

野田（1996）は助詞ハに関する学説を以下のように手際よくまとめている。①主題の用法を基本とし、対比の用法を派生とする対比派生説。②対比を基本とし、主題を派生とする主題派生説。③尾上圭介（1981）の「二分結合」など、構造的な面を本質とする構造本質説。④「とりたて」など意味的な面を本質とする意味本質説。⑤典型的な主題と典型的な対比が連続するとみるプロトタイプ説。このように学説を5つに分類し、さらに第6の説として、本質説の長所とプロトタイプ説の長所をとりいれた複合説を提唱している。

筆者は前田（1995）で述べたように複合説である。しかし、主題と対比はハが同時に合わせ持つ基本的な機能である点と、とりたて的な意味を重視する点に関しては同じであるが、次のようにハの焦点形成の強弱を問題にする点において野田の複合説と異なっている。

ハは本来焦点を形成する力をもつ。一般に言われる対比は一文に主題が複数存在するために焦点が分散し、焦点が分散した分だけ主題性が薄れたもの、一般に言われる主題のハは文脈によって規定される範疇を全体集合とし、ハによって取り出されたものの残余を補集合とした両者の対比であるが、対比の相手が明示されない分だけ焦点を形成する力が強い。以上が野田の複合説と異なる筆者の考えの概略である。

このような機能を持つ助詞ハと会話におけるハの省略はどのような関係をもつのであろうか。無助詞による主題の提示は松下大三郎が既に『改撰標準日本文法』（1928）においてハを使用しない［―、…］を題目語のなかの単説として分類している[1]。それと現代口語会話で頻用されるハの省略はどのような関係があるのだろうか。

助詞省略全般に関する先行研究はさほど見当たらないが、助詞ハに関するものは多少ある。入手できたものでは筒井通雄（1984）、丹羽哲也（1989）甲斐ますみ（1991）、長谷川ユリ（1993）、野田尚史（1996）がある。このうち

丹羽では助詞省略全般が考察の対象とされている。筒井は助詞ハ省略の条件について、丹羽は助詞の省略に関して主題と格と語順について、甲斐は助詞ハ省略に関わる２つの条件について、長谷川は無助詞の特別な機能について、野田はハとガを比較しながら無助詞の性質や機能についてそれぞれ論じている。諸説を概括すると、会話における助詞ハの省略は、身近にあるものが強い対比的意味を持たない主題となったときに生じる現象であるということになる。以下に今回の収集例から該当するものの一部をあげる。以後引用例の人名は漢字が分からない場合ひらがなで表記する。

(1) 今日のてっちゃんφ（ハ）、へん。（夢）

(2) あなたφ（ハ）、そんなに大変なの。（熱中①）

(3) これφ（ハ）、ちょっと固いんじゃない。（同）

(4) わたしφ（ハ）、もうどうしたらいいか分かんない。（まかせて）

(5) そういうこと分かってないんだもん、竹下家φ（ハ）。（番茶）

確かに収集したハの省略例はほぼ総てこのように身近なものが主題となり、直接対比がなされていない場合である。だからといって、助詞ハの省略をそのようなものとして結論づけていいものだろうか。例えば、次のような会話はどうであろう。

(6) A：三角形の面積φ（ハ）、どうやって出すんだったかな。
B：三角形の面積φ（ハ）、簡単だよ、底辺かける高さ割る２じゃないか。

数学が普通の人の会話にのぼるとき、身近な話題であるとはいいがたい。それでも、無助詞になりうるのである。三角形の面積を円や台形のそれに変えても同じである。三角錐の体積に置き換えても助詞ハの省略が不可能とは考えられない。

さらに、収集例のなかでも、次のように身近とは言えないやや観念的なものが無助詞になった例もある。

(7) お母さんの経験、主婦の感覚φ（ハ）、普通の家の引越しには大事です。（番茶）

これまでの大半の説はハが無助詞化する条件として次のものをあげている。主題が身近なものであること。心理的に話し手、聞き手に近いものであること。既知の情報であること。しかし、このような条件は助詞ハ省略にとって本質的なものではないと考えられる。これは、ハの無助詞化の条件というよ

り、助詞ハに付随した問題、すなわちハ使用の条件に関わる問題であり、そのようなものとしては現在では既に語り尽くされた感のある事柄である。

甲斐（前掲）では、ハ省略の要件として上記の要素が関わることをあげた上で、さらに、話者が強い確信を抱き、強く主張する場合は、ハは省略しにくいと述べ、例の１つに「私ハ（＊φ）若い。」をあげている。甲斐はこのような場合も、「私φ（ハ）若いみたいだ。この前の検査で２０代の体力があるといわれた。」のように、文末表現を変え、確定の度合いを変えたり、「よ」「じゃないか」「ね」「～なんかじゃない」「のだ」のような聞き手への配慮を示す形式を付け加えればハ省略の容認度はあがると説明している。

上の例、「私ハ若い。」については、筆者はこれだけでも文末に終助詞を加えるだけで次のようにハの省略が不自然ではなくなると考える。

(8)　私φ、若いのよ（／若いわよ）。

このようにハの省略はハがマークするものに関する要件より、文体のレベルに大きく関係していると考えたほうがよくはないだろうか。

(9)　a　父ハ（＊φ）喜んで賛成する。

b　父さんφ（ハ）喜んで賛成なさるわよ。　（番茶）

c　おやじφ（ハ）、喜んで賛成するさ。

上のａ、ｂ、ｃの違いは文体ないし語彙の違いだけである。このようにハの省略は使用語彙を含む文体に大きく依存しているといえる。

甲斐（前掲）ではさらに、「三角形は辺が三本ある。」のような論理的、普遍的判断を述べる場合には「は」は絶対に落とせないとされているが、これも、文体のレベルを多少変え、会話の中に組み込むと省略不可能ではなくなる。

(10)　A：おい、三角形φ（ハ）、辺φ何本あったかな。

B：今ごろ何言ってるんだ。三角形φ（ハ）辺φ三本あるに決まってるじゃないか。

このようにハ省略の条件はまず第一に、くだけた文体を使用したいかにも会話的な文であることといえる。これは通常省略できないといわれている強い対比を表すハにおいても可能になる[2)]。次の例がそうである。

(11)　a　あのケーキは、僕ハ（?φ）食べましたが、山田君ハ（?φ）食べませんでした。

b　あのケーキ、おれφ食ったけど、山田のやつφ、食わなかった

ぞ。

このことは、筒井（前掲）で省略が不自然とされる例「太郎ハ来たけど、花子ハ来なかった。」も同様である。次のような状況ではハの省略が必ずしも不自然とはいえない。

(12) A：昨日のパーティー、太郎も花子も来たかい。
B：太郎ハ（?φ）来たけど、花子φ来なかったよ。

Bはさらに、「太郎のやつφ来たけど、花子のやつφ来なかったよ。」と一層くだけた会話調にすると省略が自然になってしまう。しかし、実際に収集した例の中には一例も強い対比におけるハ省略の例が見られなかった。このことからも、典型的な対比のハは通常省略になじまないと考えた方が無難であるかもしれない。それでも、上に見たように不可能とは言えないのである。

このように、ハ省略の条件はまず文体にあるといえる。ただし、文体がどのように会話的になっても、ハの省略が不可能な場合がある。筒井で「「Xハ」の対応部分が省略された時。」と規定されている以下のようなものである。

(13) A：これφ、何？
B：それφ、友達からのプレゼント。
A：あれハ（*φ）？

最後の「あれハ」の後ろに「何？」や「何ですか」が省略されているのでハの省略は不可能とされる。これは文体や使用語彙に関係なく、いかなる場合にも該当する。

しかし、筒井で他にハの省略を極めて不自然としている「「Xハ」が焦点である時」「「Xハ」の対応部分が強調される時」という要件は助詞ハの機能に密接に関わることがらであり、省略の可能、不可能としてより、むしろハを省略した場合と省略しない場合の意味論的差違として考察すべき問題と考える。それについては次項で述べる。

最後に否定文についても簡単に触れておきたい。筒井では「否定のスコープを表わす「ハ」の例も対照の「ハ」の好例」、すなわち省略できない例として、「僕はきのうハ（*φ）泳がなかった。」「花子は次郎とハ（*φ）踊らなかったよ。」があげられている。これはハの意味論的な問題なので、次項にゆずり、ここでは否定文におけるハの省略の実例を一部あげるにとどめておく。ただし、筒井の文例ほど強い対比の例ではない。

(14)　自分の自由な時間φ（ハ）ないのよね。　（番茶）
(15)　がっかりすることφ（ハ）ないわよ。　（車椅子Ⅰ②）
(16)　やめることφ（ハ）ないのよ。　（車椅子②）
(17)　なんだ、おまえφ（ハ）、知らないのか。　（夢）
(18)　ようこφ（ハ）ゆうべもきょうもいなかったし。（熱中①）
(19)　お金φ（ハ）もう返ってこないんですか。　（車椅子①）
(20)　おれφ（ハ）うまくいえないですけど　（同）

ここで助詞ハの省略に関する規則をまとめると以下のようになる。間投助詞を多用するようなくだけた文体、終助詞その他会話的文末表現を使用したくだけた会話調文体ないし抑揚等による会話的発話においては以下の①，②，③の場合を除き、助詞ハは省略できる。ただし、ハ省略とハ使用は意味論的に等価ではない

省略不可能ないし省略になじまない助詞ハは以下の場合である。

①　助詞ハでマークされた主題に対する述部が省略されている時。

②　強い対比を表わすハの時。

③　ハが部分否定を形成し、また、ハが最大値、最小値をマークする時。

③については後述する。

上のハ省略の条件、「抑揚等による会話的発話」の中には敬語使用も含まれる。次の(21)は既に使用した例、(23)は小料理屋の女将とおぼしき中年の女性が常連客を客の自宅まで送って、その家族に向かって発話したものである。いずれも敬語が使用されている。

(21)　父さんφ（ハ）喜んで賛成なさるわよ。　（番茶）
(22)　お父様φ（ハ）気持ちよく許して下さったわよ。　（同）
(23)　丸田さんφ（ハ）よほど嬉しいことがおありになったようで…
（同）

このように会話調であることと敬語使用は矛盾するものではない。

5．2　助詞ハ省略の意味

形式が異なれば意味も異なるという言語学の原則は、助詞ハの使用と省略の間にも存在する。長谷川(1993)は無助詞の機能の一つに、対比性や排他性を不問にして中立的に取り出す「やわらげ」を認めている。筆者も基本的には同意であるが、やや異なる見解をもつのでそれについて述べてみたい。

拙論（1995）で述べたように、助詞ハは取りたての機能を有し、文の焦点を

形成する。否定文においてはハの焦点形成の機能が否定のスコープを焦点に引き寄せ、ハでマークされたものだけを否定し、ハが含みとして背後に有しているものに否定の力が及ばないように作用する[3)]。

(1) 今日ハ買い物に行かない。

(2) 今日買い物に行かない。

(1)は「買い物に行くが、それは今日ではない」とほぼ同意である。そこには「きのう買い物に行ったこと」「来週買い物に行くこと」などの含みまでは否定しないという含意がある。これに対し、(2)は単に「今日買い物に行くこと」のみを否定していて、ほかに何ら含みはない。

これ一つをとってもハの省略がハを復元した文と同意になるとは考えられない。さらに分かりやすい例を挙げてみよう。

(3) a ここから駅まで10分ハかからない。

b ここから駅まで10分かからない。

(4) a 明日のパーティーに留学生が８人ハ来るよ。

b 明日のパーティーに留学生が８人来るよ。

(5) a このケーキは全部ハ食べない。

b このケーキは全部食べない。

(3)(4)(5)ともそれぞれハのあるなしで意味が異なっている。(3)ａは最大値10分を否定して10分未満であることを暗示しているのに対し、ｂにはそのような含みがなく単に「10分かかること」を否定しているにすぎない。(4)ａは最小値が８人でそれ以上の可能性を暗示しているのに対し、ｂはただ８人来ると言っているだけである。(5)ａは部分否定であり、ｂは全否定である。

このような意味の違いは、ハに内在する主題提示、対比、焦点形成、焦点による否定の引き寄せという機能の作用である。したがって、ハが省略されるとこのような機能がハ使用時に比べて十分に作動しないことになる。しかし、ハが省略されても、松下大三郎が指摘した無助詞による主題提示の機能は残る。だが、主題を提示する力はハで提示する場合に比べると弱くなる。さらに、ハの消滅とともに焦点形成の力は減少し、否定引き寄せの力も、明示された対象と直接あるいは暗示された含みとの間接的な対比の力も消滅ないし消滅に近い状態になる。実例を見てみよう。

(6) けいぞうさんφ（ハ）、どうしてそんな歯の浮くようなこといえちゃうのかしら。 （まかせて）

(7)　なんだ、おまえφ（ハ）知らないのか。　（夢）

(8)　おまえφ（ハ）やっぱ今日ちょっとおかしいわ。　（同）

(9)　あなたφ（ハ）そんなに大変なの。　（熱中①）

(10)　おまえφ（ハ）まだ願書見てるのか。　（同）

(11)　あんたφ（ハ）何やってるの。　（番茶）

以上は呼びかけとも主題提示ともとれる悩ましい例のごく一部である。ハの省略にはこの種のものが非常に多い。ハの省略の持つ意味の一つはこのような曖昧化である。長谷川（前掲）はこのような無助詞による提示は聞き手の注意を喚起するために使用されるとして、これを「信号性」と呼び、信号性が呼びかけに近接することも指摘している。

次の収集例は助詞を復元するときハかヲ、ハかガのどちらがいいか迷うものである。なかには無助詞が最も適切かもしれないと思われるものもある。

(12)　これφ（ハ／ガ）私の連絡先です。　（熱中①）

(13)　あんたの顔φ（ハ／ヲ）見たくない。　（同）

(14)　奥歯φ（ハ／ガ）がたがたのくせに。　（まかせて）

(15)　ご主人φ（ハ／ガ）喜ばれたんじゃないですか。　（同）

(16)　その心意気φ（ハ／ヲ）しかと見とどけました。　（同）

(17)　お宅の社宅φ（ハ／ガ）売りに出されました。なくなるんです、お宅の社宅φ（ハ／ガ）。　（同）

(18)　まる君φ（ハ／ガ）自身のことね、さゆりさんやみんなに迷惑のかけっぱなしで情けないって言ってた。　（同）

(19)　ひとの娘、横取りしやがって、あのマザコン男φ（ハ／ガ／0）。（番茶）

(20)　模擬面接φ（ハ／ヲ）やっとかないと本番できっと失敗しちゃう。（熱中②）

(21)　きょうね、リレーの練習で、まりφ（ハ／ガ）、一等になったんだよ。（同）

(22)　おかあちゃんφ（ハ／ガ）どうしてそんなものを。（車椅子①）

助詞の脱落と考えられる個所は、録画を繰り返し見ながら、文脈によって復元していった。それでもこのように決定困難なものが多い。だが、復元時のこの種の決定困難こそ、助詞省略ないし脱落の機能ではあるまいか。

助詞の省略・脱落は単なる言葉の効率性、経済性のみの問題ではなく、文

体によるある種の感情表出の問題である。換言すれば、意味に関わる問題である。すなわち、間投助詞の使用、終助詞の使用、会話的な文末表現の使用とあいまって、助詞の省略は助詞使用による分析性、論理性を回避し、発話のフォーマル度を下げる役割を担い、発話を情的なものにする働きをもつと考えられる。

(12) はハを使用すると、［あんたの顔ハ］［見たくない］と二分され、ハ使用によって、「他でもないあんたの顔について述べる」となって焦点化と暗示的対比が生じる。ヲが使用されると、二分されることなく、したがって焦点化や暗示的対比が生じない。無助詞の場合は両者の中間的なものになる。そこでは、ハのもつ主題提示は残るが、焦点化の力は弱まり，ヲ使用の時と同様対比の意味を失うことになる。ヲとして見ればヲに無い主題提示の機能と、それに伴うかすかな焦点化が生じることになる。これは (17) のように省略されたものがハかガか分かりにくいものの場合も同様である。他に例を挙げると次のようなものがある。

(23) まゆφ（ハ／ガ）そっち行ってない？ （夢）

(24) りえφ（ハ／ガ）来てます？ （まかせて）

(23) は電話で発話されたもの、(24)は妻を訪ねてきた夫の発話である。(23)がもしハであれば［他でもない「まゆ」］について情報を求めるという意味になり、ガであれば［まゆがそっちへ行っていること］について情報を求めていることになる。(24) も同様である。φはその中間となり、ガのもつ一体としての情報ではなく、主題性はあるが、ハが有する焦点形成力は薄らぎ、暗示的対比の力は消失するといえる。一方ガの方から見れば、ガのもつ選択特定の機能がうすらぐことになる。台詞として発話された上の例は、いずれもポーズがあるようで無いようでどちらとも決めかねるものであった。これらの例に見られる無助詞は、復元可能性をもつ２つの助詞の各機能の融合作用を果たし、多少の曖昧化の効果をもたらしているともいえる。このような論理性、分析性の回避によるいくぶんの曖昧化は、ハの省略だけに限らず、他の助詞の省略にもある程度該当すると考えられる。

無助詞の一つの機能と考えられる曖昧化はハに関して次のような例に一層よく現れている。

(25) おれφ（？ハ／０）、うまくいえないんですけど。（車椅子①）

(26) 僕φ（？ハ／０）、もう一つ回んなくちゃ。 （まかせて）

(25)(26)の「おれ」「ぼく」は独り言のような感じで発話され、しかもそこにはφによる主題提示の機能も充分に感じられるものである。

6．助詞ヲ、ガ、ニの省略

日本語は古代から現代へと下るにつれて、述部中心の情意的表現から、論理的分析的表現へと変化し、格助詞が発達したといわれている[4]。したがって、現代語における助詞の省略ないし無助詞がたんなる先祖返りであるとは考えにくい[5]。そこには何らかの意味があるはずである。

助詞の省略は言うまでもなくそれを省略しても意味関係が損なわれないことを前提にしている。格助詞は格関係を示すことによって文や句の意味関係の成立に参与するものである。したがって、省略が許されるのは、格関係が損なわれない場合のみであることは自明である。どのような場合に格助詞が省略でき、どのような条件下で省略できないのであろうか。換言すれば、格助詞の省略と格関係の成立との間にどのような相関関係があるのだろうか。また、代表的な格助詞ともいえるヲとガを比較すると、上記表1が示すように、ガの省略が比較的に少ないのに対しヲの省略が圧倒的に多いのはなぜであろうか。格助詞として掴みにくさを有するニについてはどうであろうか。また、現代語における格助詞の省略が単なる先祖返りでないとすれば、それは何を意味しているのだろうか。

6．1　助詞ヲの省略

助詞ヲは通常直接目的語を示す格助詞とされている。「水ヲ飲んだ。」のような文では、直接目的語を表示していることは疑問の余地はない。しかし、助詞ヲにも「部屋ヲ出る。」「道ヲ渡る。」「公園ヲ散歩する。」「鳥が空ヲ飛んでいる。」のように機能を異にするものがある。

仁田（1993）は文の中核は述語であることを前提として、動詞述語に支配される従要素を、動詞が文を生成する際に必須的・選択的に要求する成分である〈共演成分〉と、動詞の表す働き・状態・関係の実現・完成にとって非必須・付加的な〈付加成分〉とに二分して格を規定しようとする。さらに、共演成分の中にも動詞からの必須度・要求度の違いに応じて、〈主要共演成分〉と〈副次的共演成分〉というタイプの異なりがあり、しかも、共演成分と付加成分との間には連続があって、違いが截然としないところがあるとして、格規定の難しさを述べている[6]。

主要共演成分と副次的共演成分の違いの微妙さの例として、仁田はヲに関して、次のものを挙げている。「子供たちが吊り橋ヲ渡った。」と「子供たちが運動場ヲ走っている。」のヲである。これはともに経過域を表す点では同じであるが、前者は「子供たちが渡った」では意味的に不充足感があるのに対し、後者は「子供たちが走っている」で充足しているので必須度の関係において、前者のヲは主要共演成分をマークし、後者のヲは副次的共演成分をマークしていると考えている。

一方、城田（1993）は日本語の格助詞には「１つのフォームに多数の意味・機能が混在している」という複雑さがあり、その複雑さを解きほぐすために、助詞の機能を分けることを提唱している[7]。そのうえで格助詞ヲを次のように１次機能と２次機能に分類する。１次機能は他動詞の目的というゆるい限定のもとに直接補語としての名詞をマークするヲである。城田はこれを意味論的意味を持たず、文論的機能だけを有するので文法格助詞としている。２次機能は動詞もそれと共起する名詞も意味論的に強い規定をうけるものである。これに属するのは「家ヲ出ル」や「道ヲ行ク」のように起点や道筋などを表わして用言を修飾するヲで、これを副詞格としている。

このような機能を持つ格助詞ヲは会話においてどのような場合に省略でき、どのような場合に省略できないのであろうか。実例に当たりながら検証してみよう。ヲ省略の実例の一部に次のようなものがあった。

(1) 早速、名前φ（ヲ）考えなくちゃな。　（まかせて）

(2) これφ（ヲ）貸してくれない。　（同）

(3) めしφ（ヲ）くってもいいかな。　（同）

(4) 電話φ（ヲ）くれるって言ってたんだけど。　（車椅子②）

(5) おやじの仕事φ（ヲ）手伝いたいんだ。　（番茶）

上記(1)から(5)はいずれもハの復元は無理である。これらの例を見て言えることが２つある。１つは構文論の面でヲの省略が動詞の直前で行われていることである。他の１つは、意味論的なもので、文頭ないし文頭近くでヲの省略が行われるとヲでマークされるはずであったものにかすかな提題性すなわち主題提示の影が感じられるようになることである。

目的語と動詞との間に他の要素が割り込んできた場合はどうであろうか。

(6) そういう生き方φ（ヲ）一度はしてみたいのよ。　（車椅子②）

(7) 仕事φ（ヲ）山ほど抱えて。　（番茶）

(8)　今でもね、あなたのことφ（ヲ）娘のように思ってるのよ。（同）

(9)　お尻φ（ヲ）ぴしゃぴしゃとやられるの。　（同）

いずれも副詞ないし短い副詞句が名詞と述語の間に介在しているが、ヲ省略にとって何も問題無い。この場合も文頭付近にヲでマークされるはずの語句があると、その語句がかすかに主題性を帯びていることも変わらない。

文中深い位置の場合はどうであろうか。

(10)　こないだおまえ、なんであんなことφ（ヲ）言ったんだ、かずと石塚君のこと。　（車椅子②）

(11)　あんな嬉しそうな母さんの顔φ（ヲ）見てたら、ももφ（ヲ）取りあげる気になれないのよ。　（熱中②）

これもヲの省略に問題はなさそうである。ヲ省略の場合の主題性についてはどうであろうか。いずれもハ復元の可能性はないところである。このように明らかにヲが省略されたと考えられるところでも、もしφにポーズを置けば程度の差こそあれ主題性が感じられるのではあるまいか。

(11)はさらに興味深い問題を提供している。複文の従属節におけるヲ省略の問題である。前のヲは条件節、後のヲは連体節で省略がなされている。このことから、助詞ヲは複文の従属節においても省略できると考えてよさそうである。下の例(12)がこれを裏付けてくれる。

(12)　母さんガももφ（ヲ）あやしているときの顔φ（ヲ）見たことφ（ガ）ある？　（熱中②）

前のヲは連体節のなかで省略されている。このようにヲ省略は構文的にほとんど制約を受けないといえそうである。(12)の例は助詞ヲとガ省略の優先順位を示してもいる。ガが残り、２つのヲが消え、後方の（ガ）が省略されていることはヲとガを省略する場合、それぞれの動詞に近いものが優先的に省略されること、したがってガよりも述語に近いヲのほうが省略されやすいことを物語っている。

以上のことから助詞ヲは、動詞からさほど離れていない限り主文の中であれ、従属節の中であれ省略可能であるといえる。では、動詞から多少の隔たりがある時はどうだろうか。

(13)　a　きのう駅で会ったイギリス人、日本語φ（ヲ）日本人みたいにペラペラ話したよ。

b　きのう駅で会ったイギリス人、日本人みたいにペラペラ日本語

φ（ヲ）話したよ。

上の例では文としてはbの方が自然であるが、aにおけるヲ省略も不自然な感じを与えない。したがって助詞ヲは格関係が損なわれない限り動詞とヲでマークするはずの名詞との間に多少長い語句が介在しても省略できると言えそうである。

ヲ省略の許容度は高いといえそうであるが、仁田（前掲）で経過域を表すヲのうちの副次的共演成分とされた次の(14)のヲ、城田（前掲）でヲの2次機能、副詞格とされた(15)道筋のヲ、(16)起点のヲは省略になじむだろうか。

(14) 子供たち、運動場φ（ヲ）走ってるよ。

(15) 駅へはどの道φ（ヲ）行ったら一番早いだろうか。

(16) 今日は何時に家φ（ヲ）出たの。

いずれも省略して何ら不都合はない。このように、助詞ヲはかなり自由に省略を許すといえる。これは述語動詞とヲでマークされるもの（大半が目的語であるが、城田の副詞格においても同じ）との共起制限が強く、ヲを省略しても紛れが生じにくいからと考えられる。このようにヲが省略になじみやすいことは、表1に見られるように助詞ハ同様、あるいはハ以上にヲの省略が多いことにも窺える。

6．2 助詞ガの省略

野田（1996）は、助詞ガの機能を「基本的には文の主題になっていない主格を表す助詞だが、場合によっては、単にそれだけでなく、排他的な意味が強く感じられることがある」としている。ここでいう排他的な意味とは、「～ガいちばん・・・・・」「～のほうガ・・・・・」に典型的に表れるガで、「こうであるのはこれだけであり、ほかのものは該当しない」というような意味としている。筆者は前田（1996）で、日本語にヨーロッパ型言語にある主語は存在しないことを前提に、ガの主な機能は述語の主体ないしそれに準ずるものの選択的特定、明瞭化であり、主格は述語の補語として本来存在しているのだから、ガはそのような主格を特定し、明瞭化する補助をするにすぎないとした。すなわち、ガは本来選択、特定の機能をもつもので、比較のように選択特定の対象が明示的に限定されるときはこの機能が強く前面に現れると考えている。

筆者の論であれば、「ここに赤いペンφ（ガ）あるよ。」や「きのう久しぶりに山田φ（ガ）うちに来たよ。」のような通常の主格提示のガは省略に

なじみやすく、「野球よりサッカーのほうガ（＊φ）おもしろい。」のように強い選択特定作用という機能を担わされたガは省略しにくいことが予想される。次の(1)、(2)も筆者がガの強い特定機能としたものである。

(1)　釣りは海でガ（＊φ）おもしろい。

(2)　招待客は福岡からガ（φ）まだ来ていない。

ともにガを省略すると不適格な文になってしまうか、強い選択・特定の意味が消失してしまうことになる。ガの在る無しによって意味の相違が生じてくるので、この種のガは省略できにくいという予想の正しさが証明される。ここでガ省略の実際を見てみよう。

(3)　やぎしたはるお、やぎしたあやφ（ガ）涙をこらえて歌います。（まかせて）

(4)　おまえφ（ガ）かけよ。　（熱中①）

(5)　ちょっと調整φ（ガ）狂ったけど、うまく取り戻せた言ってたから。（車椅子②）

(6)　トイレのドアφ（ガ）開かない。　（番茶）

(7)　おしっこφ（ガ）できないよ。　（同）

以上の例から2つのことが言えよう。1つはガがマークする名詞が述語の直前か近くにあって、省略しても格関係に紛れがない場合省略が行われていることである。他の1つは意味論上の問題である。文頭近くでガの省略が行われると、多少ハ省略の持つ主題性、すなわち、その語に聞き手の関心を向けたいという心理が感じられることである。(4)のガは野田（前掲）では排他の範疇に入ると思われるが、筆者はガが本質的に有する選択・特定機能がやや強く出現したものと捉えている。そのようなガが省略された(4)でさえハ省略の場合同様多少呼びかけの感じもはいり、ガ本来の意味がやや薄められている。このようにガの省略においてもハ省略との融合や多少の曖昧化が生じているといえる。ハ省略の項で述べたように、復元時にハの省略かガの省略か分かりにくいものが多いのはここに起因すると考えられる。次のような例がその典型といえよう。

(8)　おやじとおふくろφ（ハ／ガ）もう車で待ってるよ。（番茶）

これは文脈を考慮してもどちらとも決めかねたものである。ハが使われると［「おやじとおふくろ」について］の情報を伝えることになり、ガであれば、［おやじとおふくろがもう車で待っていること］を1つの情報として伝えよ

うとしていることになる。φの場合、両者の中間的な意味になると考えられる。

さらにこの種の曖昧化が進むと次のように無助詞とガの混交ともとれる現象が生じる。

(9) あの、おれφ（ガ／0）おくりましょうか。 （車椅子①）

文頭の「あの」で、ためらいの気持ちが表現され、さらにφの部分にガを使用しないことで曖昧化を図り、曖昧にすることによって押し付けがましさを避けようという発話者の配慮が表現される。長谷川（前掲）でいう無助詞の「やわらげ」機能である。

次に構文的な省略可能性をみることにしよう。まず、文の後方での省略をみることにしよう。

(10) 今まゆみから電話φ（ガ）あったよ。 （夢）

(11) じゃあね、もうすぐ飛行機φ（ガ）出るから。 （同）

(12) 結婚式出なかったら、あっちゃんφ（ガ）かわいそうじゃないの。（番茶）

(13) おれだって、ほめてもらうことφ（ガ）あるよ。 （同）

(14) 母さんがももあやしてるときの顔見たことφ（ガ）ある？（熱中②）

上の例からガの省略は文頭近くにあるか文尾近くにあるかという文中での位置には関係ないといえる。次のように倒置されて文尾でガの省略が行われている例もある。

(15) 気に入ってるんですよ、ここφ（ガ）。 （車椅子②）

複文の従属節ではどうだろうか。

(16) 言いたいことφ（ガ）あるんなら、言ってみればいいじゃないか。（熱中①）

(17) 夫婦φ（ガ）うまくやっていこうと思ったら、おしゅうとめさんと仲良くするのが一番大事だし、 （番茶）

(18) その椅子にあーちゃんの姿φ（ガ）なくなると思うとさ。（番茶）

条件節(16)や引用の名詞節(17)(18)でガの省略は何も問題ないといえる。ガ省略は全般に少なかったが、なかでも連体節（形容詞節）中のガ省略の実例を拾うことはできなかった。ここで連体節でガの省略が認められるか検討してみよう。

(19)　先週山本ガ（*φ）食べたレストランとても高かったんだって。

(20)　きのう山本ガ（*φ）ケーキ買った店とてもおいしいって評判なんだよ。

(21)　きのう友達ガ（?φ）行った店安くなかったそうだよ。

連体節におけるガの省略は極めて困難ないし不可能といえそうな例である。上の3例とも一見述語の直前にあって格関係に紛れが少なく、省略できそうである。ところが、そうならないのはどうしてだろうか。おそらくこれは節を越えて支配力を及ぼすハを省略した場合との混同を避けたいという意識が働くためではあるまいか。ガの影響力は小さく、節内で消滅するのに対し、ハは節を越えて述語まで支配力を及ぼし、(19)では、［山本高かったんだって］(20)では［山本評判なんだよ］となりかねないからである。

動詞述語文の連体節におけるガ省略の難しさに対し、形容詞（／形容動詞）述語文の場合、省略は不自然でなくなる。

(22)　魚料理φ（ガ）うまい店知らないか。

(23)　足φ（ガ）すごく丈夫なやつしかそんな距離歩けないよ。

形容詞、形容動詞が述語の場合、動詞述語文の場合と違って、ガによってマークされるものとの共起制限が強く、それだけ他の助詞省略との紛れが少ないからと考えられる。(22)の連体節であれば、「魚料理］と「うまい」の間にハの混入を許さないほど、述語「うまい」がガでマークして要求するものとの共起制限が強いといえる。このような共起制限の強さと助詞省略の容易さの関係は次のように、動詞が多少形容詞的性格を帯びる可能動詞の場合にも現れてくる。

(24)　この中に英語φ（ガ）話せるもの何人いるだろうか。

(25)　このへんできれいな海φ（ガ）見えるとこ知ってるよ。

上記(24) の例はヲの省略としても構わない。省略がガであるかヲであるか迷う所は、ガかハかで迷うときのような複雑な問題は含んでいない。以下のガないしヲ省略の実例では可能の意味が入る場合か、受け身または動詞にタイが付く場合のようにガとヲの両者をとる可能性があるときに限られていた。

(26)　そんなことより、走るのφ（ガ／ヲ)速くなりたいよ。（熱中 ②）

(27)　おれ、首になったんだよ。そんなもん（ガ／ヲ）受け取れるかよ。（夢）

(28)　このお金φ（ガ／ヲ）持ち逃げされたんですか。　（車椅子①）

以上のことから、助詞ガの省略については以下のようにまとめられそうである。

① 単文においては文頭近くであっても文尾近くであっても、ガの省略は可能である。ただし、単文の文頭近くでガの省略が行われたとき、ハ省略と区別しにくくなることがある。その場合はハ省略との融合に似た現象が生じる。

② 複文の主節では文尾近くでもガの省略が起こりやすい。

③ 複文の条件節では述語からさほど離れない限り、ガの省略に強い制限はない。

④ 複文の連体節の中では動詞述語文の場合、省略が難しく、形容詞、形容動詞述語文においては省略が容易である。

⑤ 比較のように明示的な選択特定の対象が考えられるときガの省略は不可能である。

ガの省略が予想ほど多くなかったのは、前述のように述語に近いヲのほうが省略されやすく、その分前方にあるガが残されやすいこと、上記④、⑤のようにハやヲの省略に比べて省略に関する制限がやや強いことのためと考えられる。

6．3 助詞ニの省略

助詞ニは捉えかたの難しい助詞である。例えば、「本を友達ニあげた。」「本を友達ニもらった。」では、本にとって逆方向の移動が同じ助詞ニを使用して表現されている。いわば着点と起点という相反する意味を同じ助詞で表現しているわけである。このように助詞ニは複雑で、それゆえに「格のゆらぎ」の例としてよく取り上げられている[8)]。

ニのもつ捉えどころのなさはニの省略にも反映されるのか、省略という視点からも複雑であり、収集できた省略の実例も少ない。まず、実例を総てあげてみよう。助詞へに置き換え可能なものがあるが（へ）は略すことにする。

(1) 医者φ（ニ）行けよ、おれ、バイトだから。 （まかせて）

(2) ねえ、お風呂φ（ニ）入ろうよ、みんなで。 （ 同 ）

(3) 模擬面接φ（ニ）行きます。 （熱中②）

(4) あんなに何回も芸大φ（ニ）挑戦してたんだもん。 （ 夢 ）

(5) 受かっちゃうと、いっちゃん、大阪φ（ニ）行っちゃうのか。（ 同）

(6) まゆ、そっちφ（ニ）行ってない。 （ 同 ）

(7)　よりによってこんな店φ（ニ）入ってきやがって。　（同）

(8)　お前、福岡φ（ニ）行ったんじゃなかったのか。　（同）

(9)　今日パリφ（ニ）発つのか。　（番茶）

(10)　たまにうちφ（ニ）いらしてくださるのはうれしいけど。（同）

(11)　いつから泣き上戸φ（ニ）なったの。　（同）

(12)　今日はちゃんと衣装合わせφ（ニ）行ってよ。（同）

(13)　父さん、どこφ（ニ）出かけた。　（同）

(14)　どこφ（ニ）行っちゃったんだろうね。　（同）

(15)　結婚式φ（ニ）出なかったらあっちゃんかわいそうじゃないの。（同）

以上が収集できたニ省略の総てである。一見して目に付くのは「行く」の前のニの省略が多いことである。15例のうち約半数の7例もある。助詞ニの省略に関して丹羽（前掲）では、省略が「「に」で可能なのは様々な「に」のうちの一部であり、多くは「行く」「来る」「入る」「着く」などの補語として着点を表す場合である。（中略）これ以外の「に」で「φ」が可能なものは多くない。」と述べられている。確かに「行く」に関するニ省略の例では着点（行き先）のニの例が圧倒的に多い。この種のニは助詞へに置き換えできるものである。しかし、単に行き先（着点）だけでなく、(3)や(12)のように目的を表すニの省略もある。これはへに置き換えはできない。

上記丹羽で触れられていない動詞の前でのニ省略の例としては、(4)(9)(11)のようなものがあった。特に、(4)の「挑戦する」や(11)の「なる」に続くニの省略はやや意外でもあった。このように丹羽で挙げられている上記の動詞以外にも省略可能な場合があるので、以下、どのような動詞の場合に、あるいは、助詞ニがどのような意味を持つ場合に省略可能なのか検討してみることにする。収集した実例が少なすぎるので、『日本語教育事典』（大修館書店、1992）の格助詞ニの項（p.392）の分類に従って検討してみよう。単文で省略可能な場合は、それぞれ複文の従属節についても調べることにする。

(1) 在り場所を表す。

①　あの庭φ（ニ）池があるよ。

②　弟は今大阪φ（ニ）居るよ。

③　子供部屋φ（ニ）電話ある家なんかちょっと変じゃない。

在り場所を示すニは省略できそうである。もっとも、①は助詞ハとの融合とも考えられる。

(2) 行く先を表す。

ニ省略の代表的なもので、既に検討済みなので実例は挙げない。複文でも以下のように省略できる。

④ 京都φ（ニ）行く者は3時に駅に集合だぞ。

(3) 物の授受などを行う相手を表す。

⑤ 山田ニ（*φ）電話したぞ。

⑥ 答えを先生ニ（*φ）聞いたら教えてくれなかったぞ。

⑦ 彼女ニ（*φ）借りた本なくしてしまったよ。

この種のニで省略が許されないのは助詞ガとの混同の可能性が強く、意味の上で不都合が生じるからであろう。

(4) 動作や態度が向けられる先を表す。

⑧ おまえ、あんまり母親ニ（*φ）甘えるなよ。

⑨ うちの犬、お客さんニ（*φ）吠えてばかりで困ってるんだ。

この種の動詞ではニでマークされる語が動詞の必須成分なので、ニを省略してもガやヲとの混同の可能性はない。省略しても他の助詞との混同の惧れがなく、また、動詞の直前にありながらニの省略が許されないのはなぜであろうか。それは、ニの付く語が必須成分としてさほど強くないからと考えられる。このことは⑨なら、「うちの犬、吠えてばかりで困っているんだ。」で文が充足している感じを与えることでも分かる。必須成分であっても二次的な成分の場合は、それがなくても十分に文が成り立つので、助詞を省略するとその成分が文中で浮き上がり、意味上の混乱が生じる惧れが強いのである。

さらに、これまでで言えることは、複文の場合を除き、文を多少変えてニでマークされた語を主題化（提題化）するとき、ニなしでも主題になるものでは通常の語順のときニが省略でき、主題化の際にニハの形でしか主題提示ができないものでは、ニの省略ができないことである。例えば、ニ省略を許す②は「大阪ハ（ニハ）今弟が居るよ。」とハだけでも主題化できるのに対し、ニ省略を許さない⑨では「お客さんニハ（*ハ）、うちの犬、吠えてばかりいるんだ。」とハだけでは主題化できないのである。これは他の場合にも敷延できるのであろうか。以下それぞれ主題化した文を添えて提示する。

(5) 原因を表す。

⑩ 彼女恋ニ（*φ）悩んでいるんだよ。

恋ニハ（*ハ）彼女悩んでいるんだよ。

(6)　変化の先を表す。

⑪　山田がハムレットφ（ニ）なったよ。

ハムレットハ（／ニハ）山田がなったよ。

⑫　山田をハムレットニ（?φ）しようよ。

ハムレットハ（／ニハ）山田をしようよ。

(7)　時を表す。

⑬　山田は今年の秋φ（ニ）結婚するよ。

今年の秋ハ（／ニハ）山田が結婚するよ。

(8)　受け身文の動詞の主体を表す。

⑭　山田ニ（*φ）殴られた。

山田ニハ（*ハ）殴られた。

(9)　使役文の動詞の主体を表す。

⑮　山田ニ（*φ）その仕事をやらせた。

山田ニハ（*ハ）その仕事をやらせた。

(10)　形容詞の状態が成立するための基準や志向対象などを表す。

⑯　AはBニ（*φ）等しい。

Bニハ（*ハ）Aが等しい。

⑰　山田は酒ニ（*φ）うるさい。

酒ニハ（*ハ）山田がうるさい。

助詞ニが省略できるものと、ニをはずしてハだけで主題化できるものとの間にはこのようにほぼ百パーセントに近い対応がみられる。ハだけで主題化できないということはそのハがガを代行しているのかヲを代行しているのか、ニを代行しているのか不鮮明だからである[9]。助詞ニが省略できない場合も同様にガ格かヲ格、場合によっては所属不明の格すなわち、文中で遊離してしまい、文を混乱へと導くものとの紛れがあるからと考えてよい。

ニが省略できないのは復元時に他の助詞との紛れが生じる場合のほかに、次のようなことが考えられる。ニ格が述語に呼び出される必須（共演）成分でありながら、その必須の度合が弱い場合である。⑩「彼女は恋ニ悩んでいる。」は、「彼女は悩んでいる」だけで充足感がある。したがって、原因のニを省略すると「恋」が文中で浮いてしまい、格の所属が不明になる惧れがある。これに対し⑪「山田がハムレットニなった。」は、「山田がなった」だけでは充足していないので、「ハムレットに」は「なった」に規定される

強い必須成分である。このように第一次必須成分とでもいうべき強い必須成分の場合は助詞ニがなくても他の格との紛れが生じないのでニの省略は許され、同じ必須成分であっても、⑩の「恋に」のように弱い成分ではニの省略が許されないと考えられる。

さらに、助詞省略の優先順位の問題を考慮しなければならない。「僕φ（ハ）北海道φ（ニ）行ったことφ（ガ）あるよ。」のように同時に助詞を省略しても紛れが生じない場合もある。しかし、「僕φ山田ニ（*φ）殴られたことφあるよ。」のように、助詞を省略すると文に紛れが生じる場合、ニ省略の優先順位は低く、省略が認められにくくなる。

丹羽（前掲）では、助詞ニの省略は「行く」「入る」など極度に限られた動詞の場合に生じるとされ、「が」格「を」格との混乱が回避されることを前提に、文脈照応や既知、未知といった情報論の立場から説かれている。会話である以上、あるいは、談話の文法である以上、現場指示や文脈照応、既知、未知の情報論を考慮すべきかもしれないが、ニの省略は、

① ニ格がその文の述語にとって強い必須成分であるか否か、

② 省略しても助詞ガ、ヲとの紛れがないか、

③ 他の助詞と同時に省略しても意味上の不都合が生じないか、

以上の３点から考える方がより妥当なのではあるまいか。

ニ省略の意味はヲ、ガ省略の場合と同様にある程度ハ省略との融合が考えられる。それはニ省略部分にポーズを置けばさらに顕著になる。先に挙げた例、「あんなに何回も芸大φ（ニ）挑戦してたんだもん。」で、φの部分に間をおけば「芸大」がかすかではあるが、主題性のおもむきを帯びることでも分かる。ニ省略によって論理性を下げ、発話を多少曖昧にして、情意化する点も他の助詞の省略と同様である。

７．その他の助詞の省略

丹羽（前掲）では、「そういえば、この公園φ（で）一郎がよくトレイニングしてたな。」「あの飛行場φ（から）きのう爆撃機が飛び立っていったぞ。」のように、デ、カラも省略可能とされている。だが、筆者はこれはむしろハの省略で、無助詞による主題化であると考え、カラやデが通常省略になじむ助詞とは考えない。例えば、「お困りですか、腰痛φ。」あるいは、「腰痛φ、お困りですか。」の場合、確かにデの省略ともとれるが、これもハの省

略、ないし主題提示のための無助詞と捉える方が妥当であると考える。この種の主題提示の無助詞は収集例のなかに次のものがあった。

(1)　お父さんφ成長したね。　（車椅子②）

(2)　ご懐妊φおめでとう。　（まかせて）

このようなものはハの省略ととれないでもないが、本来無助詞と考えるほうがより適切であろう。

収集例の中では引用の格助詞トの省略例が1例あった。

(3)　ちょっと調整狂ったけど、うまく取り戻せたφ（ト）言ってたから。　（車椅子②）

関西弁では、「あいつ今夜来ないφ（ト）言いよりますねん。」のようにかなりトの省略がみられるようである。しかし、本稿では共通語を考察の対象とし、収集例が1例しかないことから、現在のところ個人的な言い癖の域を出ていないと判断し、トの省略は扱わないことにした。

助詞の省略例を収集し、検討していくなかで特筆すべき現象があった。名詞「こと」の後における助詞省略がかなり頻繁に行われているのである。

(4)　そのことφ覚えてるかなと思って。　（夢）

(5)　じゃ、あやおじょうさん、竹下陶器へお嫁に行かれることφ決まったんですか。　（番茶）

(6)　お母さんに悪いけど、あんなに古臭い記事いつまでとっといたって何にもいいことφないんだもん。　（車椅子②）

(7)　わたし、ときえさんのことφ非難する気になれないわ。（熱中②）

(8)　言わせるなよ、そんなことφ惚れた女に。　（まかせて）

このような「こと」の後における助詞の省略は収集したもののなかで35例を数えた。格助詞のあるものが出自を名詞にもつということを考え合わせると興味深い現象であるが、本稿の目的ではないので報告するにとどめておく[10]。

8．おわりに

日本語学習者にとって助詞を正確に使用することの困難はよく知られている。しかし、日常会話において日本語母語話者が頻繁に行っているような助詞の正確な不使用はほとんど問題にされてこなかった。日本での日本語学習者が母語話者の助詞の不使用に気付くのは意外に早い。そのようなとき法則性を伴って教えることができないものかというのが本稿に取り組んだ動機で

ある。

資料収集はテレビドラマの録画によって行った。シナリオ集に依らなかったのは、自然な会話の流れの中で演技者が台本と多少異なる助詞の不使用を行うかもしれないことを考慮したからでもある。ドラマの自然な会話における助詞の不使用は予想をはるかに越えていた。これは日常会話においていかに頻繁に助詞が省略されているかを裏付けるものでもある。

収集例を検討した結果、省略されるのは副助詞（係助詞）ハ、格助詞ガ、ヲ、ニであることが分かった。このなかでハとヲの省略が多く、ガはやや少なく、ニはかなり少ないことが数値として確認された。ハの省略が多いのは、日本語では無助詞による主題提示が可能だからである。ヲの省略が多いのはヲ格が動詞に近い位置にあり、省略されても他の助詞との紛らわしさが少なく、また助詞ヲの大半が格関係表示以外に意味的機能を担っていないためであると考えられる。ガの省略がやや少ないのは通常ヲより述語から遠い位置にあるためと、複文での省略に制限があるため、さらに、ガのほうがヲより強い意味を担わされる場合が多いためであろう。ニの省略にはガ格ヲ格との混同の回避、述語のニ格に対する必須度の違いが関わってくることなど様々な制限が伴うことが分かった。

助詞の省略が意味関係を損なわない範囲で行われることは周知である。しかし、どのような場合に、また、なぜ省略が可能になるのかを究明することはさほど容易ではない。さらに、省略の意味についての考察はこれまで極めて少ないといえる。先行研究では情報論的な考察に省略の根拠を求めるものが多かったが、本稿では述語との共起制限、述語に喚起される必須度の強弱、構文論などにその根拠を見出そうとした。ハ省略の意味は焦点化の弱まりによる和らげであり、ガ、ヲ、ニ省略の意味はハ省略の持つ主題性とのある程度の融合と、多少の曖昧化により会話に情意性を帯びさせることにあると考えた。

本稿はまず資料の収集から着手した。資料の分析は語感が頼りである。参考文献の文例を見ると省略に関してときおり筆者との語感の違いが感じられることがある。したがって本稿の省略頻度表も多少の誤差が含まれていることは否定できない。誤差をより小さくするためにも、語感により一層の普遍性を求めるためにも、このような研究はチームを組んで互いに検討しながら行うことが理想であると考える。

〈注〉

1）松下は次のように述べている。漢字は現行のものを使用して引用する。「題目語に分説、合説、単説の三種有る。（中略）分説は事情の異なるものと分けて云ひ、合説は事情の同じものと合せて言ひ、単説は分合せずにいふ。分説は「は」を附け、合説は「も」を附ける。単説は助辞がない。」

2）対比のハが省略できないことについては、筒井（1984）p．114、野田（1995）p．270を参照。

3）前田昭彦「助詞ハの機能と部分否定」『長崎大学外国人留学生指導センター紀要第3号』pp，52-60参照。

4）山内洋一郎「中世前期語（鎌倉）」『講座日本語学3』（明治書院、1981）では「（前略）主格助詞なしを減少させたのは、語順と概念語に依存していた古代語が、格を明示する助詞を要求するという分析的表現・論理的表現へと進化する人々の欲求であろう。」と述べられている。

5）浅見　徹「上代語」『講座日本語学3』（明治書院、1981）には、「「ボク、本買ったよ。」というような表現が、幼稚にせよ、不整にせよ、ともかく日本語として成立しうるのは、その辿ってきた歴史の中での、「が」や「を」を必須のものとしなかった名残りといってよかろう。」とある。

6）これは山梨の「格のゆらぎ」という概念に共通すると思われる。山梨正明「格の複合スキーマモデル－格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐって』（くろしお出版、1993）参照。

7）城田　俊「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』（くろしお出版、1993）参照。

8）そのような例は上記の山梨や仁田義雄「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐって』（くろしお出版、1993）、同じく仁田「格のゆらぎ」『月刊言語11』（大修館書店、1995）で扱われている。

9）助詞ハによるガ、ヲ、ニの代行という表現は三上　章『象は鼻が長い』（1960）でさかんに使用されている。

10）浅見　徹「上代語」（上掲）では、「「へ」や「から」が本来名詞であって、上代という時代の中で、次第に格助詞として確立されていく過程は、すでに証明されているといってよい。」と述べられている。

主な引用・参考文献

浅見　徹（1981）「上代語」『講座日本語学３』明治書院

甲斐ますみ（1991）「「は」はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化第17号』大阪外国語大学

久野　暲（1978）『談話の文法』大修館書店

城田　俊（1993）「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』くろしお出版

筒井　通雄（1984）「「ハ」の省略」『月間言語13-5』大修館書店

仁田　義雄（1993）「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐって』くろしお出版

丹羽　哲也（1989）「無助詞格の機能―主題と格と語順―」『國語國文』58-10

野田　尚史（1996）『「は」と「が」』くろしお出版

長谷川ユリ（1993）「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育80』

前田　昭彦（1995）「助詞ハの機能と部分否定」『長崎大学外国人留学生指導センター紀要第３号』

――――（1996）「長崎方言による共通語助詞ガの分析」『長崎大学外国人留学生指導センター紀要第４号』

（留学生センター非常勤講師）